

1 子どもたちの多様性に根ざした学校へ

子どもたちの学習のペース、興味関心、得手不得手、習得状況などは、一人ひとり多様です。読み書き、計算などの学習面の困難、あるいは多動性・衝動性の問題、対人関係やこだわりの問題など、知的発達に遅れはないものの学習や行動に困難がある児童生徒や、日本語を母語としない、日本語指導が必要な子ども、不登校の児童生徒の数も増えています。一方、特定の知的能力に突出した特性をもつギフテッドと呼ばれる子どもたちもいます。

「個別最適な学び」は、こうした多様化が進む子どもたちを誰一人取り残すことなく育成するために提言されました。授業研究の一次的な流行、あるいはGIGAスクール構想で整備された端末を有効活用するための手法といった表面的なものではありません。子どもたち一人ひとりにとって、学校は「あらゆる面で適応を強いられる場所」でした。学校は、学年進行、時間割、標準化されたカリキュラム、学級編成などの基本的な仕組みからして、個別対応が元来、難しいものです。すべての多様な子どもたちが「ここにいていいんだ」「自分の学びが保障されている」と感じられる、多様性に根ざした学校へと転換する起点になるのが「個別最適な学び」です。

2 教育DXによる授業・学びの転換

個別最適な学びには、共通のゴールに向けて異なるペース、方法、教材等で学ぶ「指導の個別化」と、子どもの興味関心やキャリアに応じた多様なゴールに向けて学ぶ「学習の個性化」の2つの側面があります。これらが概念化されたのは1980年代のことです。手作りの教材と多大な労力をかけた取り組みは、全国から注目されましたが、大きく広がることはありませんでした。

その後、インターネットが普及し、膨大なデジタルコンテンツにアク

教育DXの有効活用 ～個別最適な学びをすすめるために～

東北学院大学文学部 教授 稲垣 忠



セスできるようにになりました。GIGAスクール構想により、児童生徒1人1台の端末が整備され、高速インターネットを介してクラウドサービスを常時使えるようになりました。学習者個別に教材を提供すること、学習者個別の状況把握に対する時間・労力が劇的に低下したので、さらにAIによる教材のレコメンドや個別のフィードバックも進化しています。DX（デジタル・トランスフォーメーション）は、ICTをたくさん使うことではなく、ICTが無ければ実現し得ない、新しい価値を作り出すことです。「個別最適な学び」を通して子どもたちにとって学校の見え方が根本から変わり、その転換にデジタルが不可欠な役割を果たしたのであれば、教育DXで学校が変わった、と言えます。

なお、「個別最適な学び」に対して、児童生徒を孤立させ、AIに言われるがまま学ばされるディストピア（反理想郷）をもたらすのではないかとといった批判があります。学習者の自己調整（何をどのように学ぶかの判断を学習者が自らコントロールできるようにすること）と協働的な学びとの一体的な充実を前提とするのはそのためです。付け足すなら、教師からの一方通行の情報伝達型の授業も、学習者の自己調整と学習者間の協働を欠いている点で同様です。教師中心の視点からの授業改善から、学習者中心の視点による学びの支援へと転換させる一助としてICTを活用することが、授業・学習における教育DXの本質です。

3 学びの転換を推進する管理職の役割

「個別最適な学び」を実践するには、児童生徒の状況を適切に把握すること、教師の授業観・学習観の変容、ICTを含めた学習環境の活用まで、広い視野が求められます。教員個々の創意工夫だけでは届かないこと、研究授業の積み重ねだけでは見えないこと、ICT担当教員のアイデアだけでは変わらないことがあります。教育委員会と連携し、学校の学びを転換させるビジョンを描き、教員の共通理解を図り、学習環境を整える方針を定め、保護者と児童生徒に説明する中心となるのが管理

職です。学校長のリーダーシップのもと、ビジョンの実現を進める教頭先生に求められる役割はどのようなものでしょうか。

4 失敗から学ぶ文化をつくる

子どもが個別に学んでいるとき、間違えたり、基礎的な理解がないまま応用問題に挑戦していたりといった姿は珍しいことはありません。人間は間違いから学びます。しかしながら、研究授業で自由進歩のような個別最適な学びを取り入れた授業を公開すると、個の取り組みがこれまで以上に目に入る分、子どもの間違いが気になってしまうことがあります。「だから個別最適よりも教師が教えるべきだ」といった声が聞かれることもあるでしょう。教師が1回、教えただけで全員ができるようになるなら、その方がよいかもしませんが、現実はそのようではありません。子どもが自分で取り組み、間違え、それに気付いたり、気付かされたりすることを通して学ぶことが大切です。その過程は1時間の授業の中で起きるとは限りません。単元を通してそれぞれのペースで学んでいる中で気づけるよう支援します。

同じことは教員にも当てはまります。最初から完璧な個別最適な学びを実践できる教員はいないでしょう（そもそも、何をもちて完璧なのでしょう）。校内ですべての教員が個別最適な学びの意義を理解しているとは限りません。教員の試行錯誤を認め、励まし、研究授業の事後検討会などで、チャレンジする教員がチャレンジする子どもたちを育てていくことを繰り返し伝えていきます。こうした間違いや失敗から学ぶ文化なしに授業観・学習観の転換が起きることはありません。

5 デジタルの学習環境を整える

GIGAスクール構想で整備された環境を児童生徒はどの程度活用しているでしょうか。授業の内外で日常的に端末やクラウドを活用し、端末を持ち帰っている児童生徒にとって、端末は学びの道具であり、い

〈連載テーマ②〉

教育DXの推進



つ、どのように使うのか判断する機会があります。タイピングなどの基礎的なスキルや、ネット上の雑多な情報から真偽や信頼性を判断し、自分の考えをまとめ、人に伝える情報活用能力を高める機会があります。

一方、教師が必要と判断したときだけ端末を使わせ、限られた情報にだけアクセスさせていると、無駄は少ないかもしれませんが、主体的に学ぶ機会は奪われてしまいます。学校長は学校CIO (Chief Information Officer: 情報化統括責任者) です。児童生徒が情報活用能力を適切に身につけられるように、端末やアカウントの管理、持ち帰りの方針など、学習環境の方針を定め、学校全体で取り組めるように支援します。

クラウド上には、児童生徒が立てた学習計画や振り返り、ドリルの正誤情報、学習成果物など、さまざまな教育データが蓄積されていきます。教育データを適切に管理するのも学校CIOの役割です。誰に共有されているのか、閲覧・編集などの権限がどのようにになっているのか、蓄積されたデータを学年（あるいは校種）を超えて持ち上がっていくのかどうか。教育情報セキュリティポリシーの面から適切な運用がされているか点検するとともに、保護者や児童生徒に説明することで、教員・児童生徒・保護者の安心感が保たれます。学校CIOのビジョンを具体化するには、教務主任、研究主任、情報担当教員の連携が不可欠です。教頭先生のコーディネーターが、教育DXを単なるICT活用で終わるか、授業・学びの転換を実現するかを左右します。

「個別最適な学び」は、多様な児童生徒のニーズに応える授業への転換である以上、その実施方法も均一なものではありません。授業観を変えることへの共通理解を図り、児童生徒、教員の試行錯誤を奨励し、安心して取り組める学習環境を整え、教員それぞれのチャレンジが共有されていった先に、あなたの学校の児童生徒の多様性に向き合った、個別最適な学びが実現します。